

解説 テオプラストス『人さまざま』 p.8

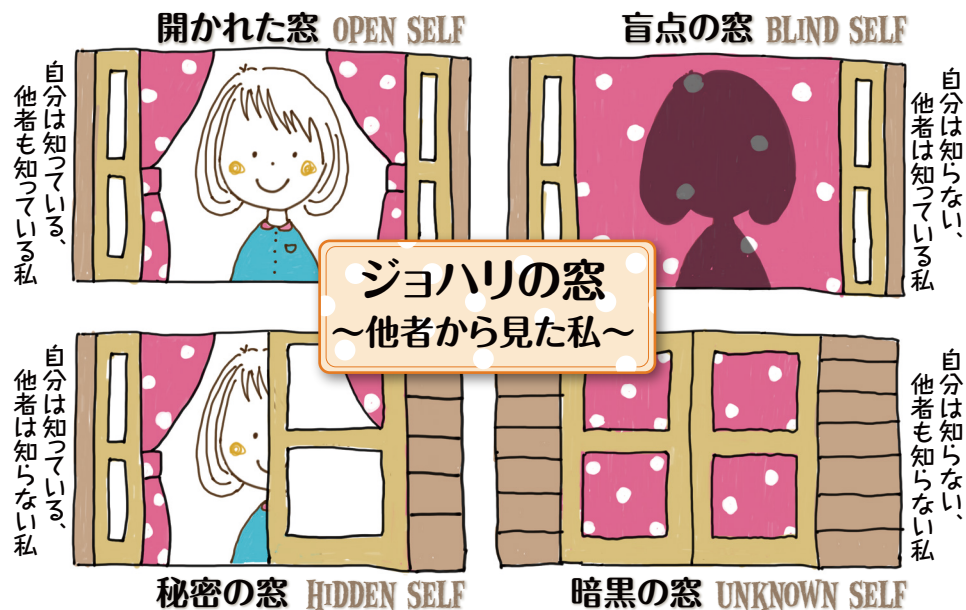
ギリシア本土は同一の気候におおわれていて、人々もすべて同じ教育を受けているのに、なぜ、我々の性格は同じではないのか。あるとき抱いたこの不審の念が、『人さまざま』（原題を直訳すると『性格論』）という書物がかかる動機となった。前書きには、そのように述べられている。

さらに前書きには、「世の中のすぐれた人、くだらない人を比較検討した」と述べられているが、現存する『人さまざま』に記されている30種の性格類型は、「へつらい」「恥知らず」「けち」など、すべて望ましくない悪徳に属するものだけである。

とはいえ、一つひとつの性格は、堅苦しい定義ではなく、ユーモラスで文学性豊かな具体的描写で示されている。「恋人が病気で熱を出しているときに、彼女の前でセレナーデ（恋の唄）をうたう」（頓馬：とんま）、「本道を通らずに近道を案内しては、ゆく先を見失ってしまう」（お節介）、「航海に出ると、突出した岬を、あれは海賊だ、と言い張る」（臆病）、といった具合である（テオプラストス、森進一訳『人さまざま』岩波文庫）。

テオプラストスは、アリストテレスのもっとも優秀な弟子であったといわれ、彼の死後、リュケイオンの学園の第2代の学頭となった。元の名はテュルタモスであったが、その話術が神がかりであったので、アリストテレスが「テオプラストス（神のように話す人の意）」と改名させたといわれている。200点以上の著作があったとされるが、現存するのは本書のほか、植物学に関する2種類の著作だけである。

自己概念 —4つの窓を通して自分を知る p.11



※「私」は、自分自身の四つの窓を通して、他者とかかわっている、とも考えられる。